

シアター
コモンズ'23

2023.
2.23-3.5

Rebooting
Touch



触覚の
再起動

開催概要

都市にあらたな「コモンズ(共有地)」を生み出すプロジェクト、シアターコモンズ。
第7回目となる今回は、「Rebooting Touch 触覚の再起動」をテーマに、パフォーマンス、インスタレーション、ワークショップのほか、メタバースなど遠隔参加も可能なプログラムを、集中的に展開します。

シアターコモンズは、演劇の「共有知」を活用し、社会の「共有地」を生み出すプロジェクトです。日常生活や都市空間の中で「演劇をつかう」、すなわち演劇的な発想を活用することで、「来たるべき劇場／演劇」の形を提示することを目指しています。演劇的想像力によって、異質なものと複数の時間が交わり、日常を異化するような対話や発見をもたらす経験をアーティストとともに仕掛けていきます。

シアターコモンズ '23

会期
2023年2月23日[木・祝] - 3月5日[日]

会場
東京都内エリア各所

主催
シアターコモンズ実行委員会
台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター
ゲーテ・インスティテュート東京
在日フランス大使館／アンステイチュ・フランセ日本
オランダ王国大使館
特定非営利活動法人 芸術公社

パートナー
SHIBAURA HOUSE

助成
令和4年度文化庁優れた現代美術の国際発信促進事業
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
【芸術文化魅力創出助成】

ABOUT

A new collective space, a new “commons,” in the city: welcome to Theater Commons Tokyo. Held under the theme of “Rebooting Touch,” this seventh edition of Theater Commons Tokyo will feature performances, installations, workshops, and other programs, as well as remote participation options that include a work set in the Metaverse!

Theater Commons Tokyo is a project to create a collective space for society that harnesses the collective wisdom of theater. By using theater – that is, by applying theatrical ideas – in the context of everyday life and the urban space, it aims to propose a model for theater(s) to come. Theater Commons Tokyo and its artists use the imagination of theater to create experiences in which diverging elements and time periods intersect, and the ordinary is defamiliarized through dialogue and discovery.

Theater Commons Tokyo '23

Date
February 23rd - March 5th, 2023

Venues
Various places in Tokyo

Organized by
Theater Commons Tokyo Executive Committee
Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan
Goethe-Institut Tokyo
Embassy of France in Japan / Institut français du Japon
Embassy of the Kingdom of the Netherlands
Arts Commons Tokyo

In partnership with
SHIBAURA HOUSE

Supported by
The Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2022, Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



Rebooting Touch 触覚の再起動

相馬千秋

丸3年が経過したパンデミック。往来や接触が制限された「触れられない時代」は、ようやく次のフェーズに進もうとしているように思われる。国境が開き、共集の場も回復しつつある。人々は移動と接触を再開し、コロナ時間に強制同期させられた時計は、少しずつ個々の時を刻み始めているようだ。しかし、ロシアによるウクライナ侵襲、それに端を発するエネルギー危機やインフレーションなど、地球規模の不安は増大し、不確実性の中でどう生き延びていくかという課題は切実感を増す一方だ。

「触れられない時代」に触れ合う方法とは何か。目に見えないウイルスという制御不能なものを、それでもコントロールするための強制的な管理と制限。これら乗り越えて、どのように芸術は、他者や他所の存在との接触領域を拡大することができるのか。そして物理的な距離によって分断されたものの間に、いかに有機的な相互作用を生み出すことができるのか。この3年間、多くの芸術がこの命題と格闘してきた。もちろんシアター・コモンズもその例外ではない。

そもそもTheater（演劇／劇場）の語源である「テアトロン」が、古代ギリシャにおいて「見る場所」を指し示していたように、演劇はその起源から「見る」芸術であった。またラテン語由来の「Auditorium（講堂、ホール）」も、聴覚auditionと同語源から派生していることから明らかなように、「聴く場所」を意味している。つまり劇場は、もともと「見る場所」「聴く場所」であり、視覚と聴覚の優位性が担保された場であることは疑いようがない。そこであえて触覚が論じられることは、歴史的にも理論的にも一部の例外を除いてほとんどなかったという。

しかし今、パンデミックを契機とする非接触の時代を経て、改めて触覚という感覚の可能性を、演劇実践の中に位置付け直す必要性を感じている。それは、物理的接触による「演者と観客の一体感」や「ライブ感」が舞台芸術の醍醐味だというような、素朴な自己肯定が目的ではない。むしろ、「触れられない時代」に触れ合おうとする逆説の渦中で、他者や他所と触れ直す方法

を開拓したいという戦略的な意図に基づく。そのポジティブな表明を、「触覚を再起動する」という言葉で表してみたい。そもそも極めて主観的な感覚である触覚を、あえて「再起動」すること。その試みは、自己の手や皮膚によって、あるいはそこからの知覚をキャッチする脳によってなされるだけではない。他者の痛みに触れ、歴史と記憶に触れ、未知の生命や存在に触れる。あるいは最新のデジタル技術の力も借りて、イマジナリーな触覚で触れる。その時、私たちの触覚は自由に拡張し、既知の身体感覚をラディカルに更新するはずだ。それは他者・他所への共感にもつながる。その可能性を芸術実践に取り入れていくことによって、新たな触覚的ドラマトゥルギーの扉を開くことができないだろうか。

今回のシアター・コモンズでは、この問いに対し、4名のアーティストがそれぞれ異なるアプローチと方法論で触覚的ドラマトゥルギーの開拓に挑む。

過去5年間に渡りAR/VR技術を活用したパフォーマンスの創作に取り組んできた小泉明郎は今回、VR演劇『縛られたプロメテウス』（2019）、VR彫刻『解放されたプロメテウス』（2021）に続くプロメテウス3部作の最終章『火を運ぶプロメテウス』で、一連の探求の到達点を提示する。天上界から火を盗み人類に授けたプロメテウスの神話は、人類とテクノロジーの緊張関係を象徴するが、実際に遺伝子操作によって人類の身体や知覚そのものが書き換えられたら、「あたらしいヒューマン」はどんな痛みや喜びを感じ、自然や宇宙との関係を再構築するのだろうか。小泉はこの問いから出発し、VRの世界でのみ体験しうる、近未来の神話を編み上げる。具体的には、実際にVR体験者の手や触覚に直接作用する方法も用い、人間の知覚に揺さぶりをかけることになる。

自らの皮膚の延長としてラテックス製のボディスーツを自作し、装着するパフォーマンスを展開するアーティスト、サエボーグ。今回シアター・コモンズおよび世界演劇祭から委嘱を受けて、非人間的なキャラクターたちが

共生するメタバース空間をプロデュースする。世界中どこからでもアクセス可能なメタバースでは、誰もが自在に家畜動物や害虫、さらには微生物や植物などに変身／変異し、ノンヒューマンの世界のルールで戯れることになる。あえてメタバースというデジタルワールドを遊び場とすることで、どんな触覚的コミュニケーションが生成されるのだろうか。

繊細な揺らぎを触覚的に掴み取る映像とテキストの両輪で独自の表現を開拓する映画監督・作家の中村佑子。彼女は今回、触れられないものにそっと触れる眼差しと手つきを、シネエッセイの手法を用いたワークショップで参加者と共有する。散文を書くように映像を綴るシネエッセイは、特別な技術がなくてもできる、日常の心象に触れ、その輪郭と質感を記録する手法である。今回は特に、コロナ禍を生きる若い世代にシネエッセイの手法を伝授し、彼らの眼差しと手つきを借りることで、コロナ禍の宙吊り感に触れ直していく。

私たちが普段暮らす都市、そこに堆積する歴史や記憶に触れるにはどうしたらいいのだろうか。佐藤朋子は、都市と歴史を自らの身体にトレースし、レクチャーパフォーマンスとして出力することで、一貫してこの問いに向き合ってきた。今回彼女は、オノ・ヨーコ、ジョン・ケージら歴史的なパフォーマンスの数々が行われてきた草月アートセンター（1958-71）の記録に触れるところから、まだ語られていない歴史／物語へのアクセスを試みる。これらの記録が生身のパフォーマンス／語り手である佐藤自身の身体を経由することで、歴史との接触面に新鮮な摩擦を生み出すはずだ。

また今回のシアター・コモンズでは、筆者がプログラム・ディレクターを務める世界演劇祭アター・デア・ヴェルト2023（2023年6月末-7月、ドイツのフランクフルト市およびオッフェンバッハ市にて開催）に先駆け、両フェスティバルが重なる3つのテーマをもとにフォーラムを開催する。もともと世界演劇祭のキュレーション・コンセプトは、2021年に開催

されたシアター・コモンズ'21のテーマ「孵化／潜伏するからだ - Bodies in Incubation」を発展させたものであり、パンデミック下の日本で構想した複数の作品や企画が、ドイツで発表される予定だ。その両方で作品を発表するアーティストたちとともに、改めて東京での実践とドイツでの挑戦をつなぐ視点で議論を深め、半年後のアウトプットに向けて、思想面でも準備を進めていきたい。

気がつけばシアター・コモンズは今年で7回目を迎える。2017年の設立以来、日本の東京という場所において持続可能なインディペンデント・ランのプロジェクトモデルとして、毎回ゼロベースからスタート、公共・民間・諸外国文化機関から複合的にファンドレイズをし、不安定ながらも継続的に事業を遂行してきた。その7回のうち、2020年、2021年、2022年、そして2023年と、半分以上がコロナ禍での開催となっている。そう考えるとシアター・コモンズはむしろ、パンデミックに翻弄されながらも、その逆境の中で新たな発想と弾力性を獲得し、進化を遂げてきたとも言える。コロナ禍を経て再起動しつつある私たちの触覚や知覚とともに、これからの「コモンズ＝共有地」はどのように広がっていくのだろうか。今回のシアター・コモンズもまた可変的かつ仮設的に、パンデミックのトラウマと空虚な祝祭のあとの東京に、ひっそりと立ち上がることになる。ぜひその場に、それぞれ可能な場所からご参加いただきたい。

プロフィール

相馬千秋（そうま・ちあき）| シアター・コモンズ実行委員長兼ディレクター（2017-現在）、NPO法人芸術公社代表理事。アートプロデューサー。演劇、現代美術、社会関与型アート、VR/ARテクノロジーを用いたメディアアートなど、領域横断的な同時代芸術のキュレーション、プロデュースを専門としている。フェスティバル／トーキョー初代プログラム・ディレクター（2009-2013）、あいちトリエンナーレ2019および国際芸術祭あいち2022パフォーミングアーツ部門キュレーター。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章、2021年芸術選奨（芸術振興部門・新人賞）受賞。2021年より東京藝術大学大学院美術研究科准教授。2023年にドイツで開催される世界演劇祭アター・デア・ヴェルト2023のプログラム・ディレクターに就任。



©NÓI CREW

Curatorial Concept

Rebooting Touch

Chiaki Soma

Three years have passed since the onset of the pandemic. It seems that we are finally moving to the phase after the “age without touch” that limited travel and contact. Borders and places for gathering have gradually reopened. People have started to travel and be in contact with each other again, and the clocks that were forcibly synced to pandemic time seem to slowly be ticking at their own pace. At the same time, we have seen an increase in global-scale anxieties such as Russia’s invasion of Ukraine and the subsequent energy crisis and inflation; the question of how to survive amid uncertainty increases in urgency every day.

How do we touch each other in an “age without touch”? We have imposed forceful management measures and limitations to control the uncontrollable—an invisible virus. How can the arts overcome these hurdles to expand the contact zone between other people and places? How can it create organic interactions between that which is divided by physical distance? For the past three years, many of us in the arts have grappled with this proposition. Of course, Theater Commons Tokyo is no exception.

The word “theater” derives from the Ancient Greek “theatron,” meaning a “place to see,” which shows how theater has always been an art form meant for viewing. In addition, the Latin-derived “auditorium” stems from the same root as “audition,” auditory; it refers to a “place to listen.” In other words, the theater is a space to “see” and “listen,” undoubtedly a site where one’s vision and hearing is prioritized. That is, the discussion of touch within this context has, with the exception of a few examples, historically and theoretically remained non-existent.

However, experiencing the era of no-contact triggered by the pandemic, I feel the necessity of repositioning the potentiality of touch within theatrical practices. The goal, however, is not some humble self-affirmation, arguing that the true joy of the performing arts lies in a sense of “unity between the performers and the audience,” or “liveness,” framed by physical touch. Rather, it is based on a strategic intent to develop ways of coming into contact again with other people

and places amidst the paradox of attempting to touch in an “age without touch.” I would like to use the phrase “rebooting touch” as a positive declaration. To go as far as to “reboot” touch—a sense that is extremely subjective—is not an attempt experienced solely by the hand, skin, or mind that perceives it. To come into contact with the pain of others, history, memory, future lives and existences, or to use imaginary touch by way of the latest digital technology—in these instances, we must freely expand our sense of touch and radically update our existing physical senses. This connects to empathizing with other people and places. By incorporating its potentiality into artistic practices, might we be able to open a new door towards tactile dramaturgy?

For this year’s Theater Commons Tokyo, four artists respond to this question through different approaches and methods to develop a tactile dramaturgy.

For the past five years, Meiro Koizumi has been working on creating performances that utilize AR and VR technology. This year, he presents the culmination of his explorations with the final chapter of the Prometheus trilogy, *Prometheus the Fire-Bringer*, following the VR theater piece *Prometheus Bound* (2019) and the VR sculpture *Prometheus Unbound* (2021). The myth of Prometheus, who stole fire from the heavens and bestowed it upon humanity, symbolizes the tension between humans and technology. When the bodies and knowledge of the human race are actually altered by genetic engineering, what kind of pain or pleasure will the “new human” feel, and how will they reconstruct their relationship with nature and the universe? Using this query as a departure point for exploration, Koizumi creates a neo-futuristic mythology that can only be experienced through the world of VR. Specifically, he uses a method that directly works upon the VR participant’s hand and sense of touch, destabilizing human perception.

Saeborg is an artist who creates and performs in her self-made latex bodysuits that serve as an extension of her skin. In this new work

commissioned by Theater Commons Tokyo and Theater der Welt, Saeborg produces a metaverse space in which her signature animals live in symbiosis. The “Soultopia” is accessible from anywhere in the world, a space where anyone can freely transform/mutate into livestock and vermin, or even microbes and plants, and frolic together under non-human rules. By intentionally choosing the digital world of the metaverse as a play space, what kind of tactical communication will Saeborg generate?

Filmmaker and artist Yuko Nakamura explores unique expressions using both film and text that tangibly capture subtle movements. For this year’s Theater Commons Tokyo, she shares a workshop with participants using the cine-essay method to explore the idea of a gentle gaze and touch that illuminates the untouchable. The cine-essay, in which one creates film as if writing prose, does not require specialized techniques; it comprises a set of methods that allows one to document the contours and textures of everyday images. By passing on cine-essay methods to the younger generation that are living through the pandemic and channeling their gaze and touch, Nakamura revisits the suspended sensations of the pandemic.

How can we come into contact with the accumulated histories and memories of the cities that we inhabit? Tomoko Sato has been consistently grappling with this question by tracing history and the city on her own body and creating lecture performances. For this year, she attempts to access unknown histories/narratives by touching on the documents of the Sogetsu Art Center (1958-71), where numerous historical performances by the likes of Yoko Ono and John Cage took place. Through Sato’s body as a live performer/narrator, these documentations will surely create new ruptures where they meet history.

For this year’s Theater Commons Tokyo, in anticipation of Theater der Welt 2023 (held from the end of June to July 2023 in Frankfurt and Offenbach in Germany and for which I serve as Program Director), we will hold forums based on three overlapping themes. The curatorial concept

for Theater der Welt originally developed from the theme of Theater Commons Tokyo ’21, “Bodies in Incubation,” and multiple works and projects that were envisioned during the pandemic in Japan will be presented in Germany. We hope to deepen discussions with artists that will be presenting works in both locations under a perspective that connects the practices in Tokyo and the challenges in Germany, making theoretical preparations for the presentation six months ahead.

Theater Commons Tokyo has fast approached its seventh year. Since its inception in 2017, it has operated as a Tokyo-based, sustainable, and independently run project model. Every year we start from point zero and fundraise across public, private, and foreign cultural institutions to consistently, at times unsteadily, continue our project. Out of the seven years, over half of them—2020, 2021, 2022, and 2023—have been held under the pandemic. In that sense, we could say that, whilst affected by the pandemic, Theater Commons Tokyo gained new ideas and resilience through this adversity and continued to evolve. As we gradually reboot our sense of touch and perception through the pandemic, how will the “commons” continue to expand? This year’s Theater Commons Tokyo will also remain variable and temporary, quietly taking place in Tokyo after the trauma of the pandemic and the empty festivities. We hope you will join us from wherever you can.

Profile

Chiaki Soma | Before establishing Arts Commons Tokyo in 2014, Soma was the inaugural Program Director of Festival/ Tokyo, where she served from spring 2009 to 2013. She has produced or curated global projects that transect categories of theater, contemporary art, and community-engaged art. She was the recipient of the Chevalier de L’Ordre des Arts et des Lettres from France’s Minister of Culture in 2015. Since 2017, she has served as the Chairperson of the Theater Commons Tokyo Executive Committee, as well as its Director. She was the Curator for the Aichi Triennale 2019. She is the recipient of Japan’s Agency for Cultural Affairs’ 71st Minister of Education, Culture, Sports, Science & Technology’s Art Encouragement Prize in 2021. Since 2021, she has been the General Producer of Toyooka Theater Festival 2021, and the Curator of Aichi Triennale 2022. She was appointed as the Program Director of Theater der Welt 2023 in Germany.



©NÓI CREW

目次

シアターcommons '23

page

- 02 開催概要
- 04 キュレーション・コンセプト
- 08 目次
- 09 プログラム
- 25 会場
- 26 スケジュール
- 28 クレジット

CONTENTS

Theater Commons Tokyo '23

page

- 03 About
- 06 Curatorial Concept
- 08 Contents
- 09 Programs
- 25 Venues
- 26 Schedule
- 28 Credit

PROGRAMS



©Meiro Koizumi

VRパフォーマンス
VR Performance

小泉明郎 Meiro Koizumi

火を運ぶプロメテウス Prometheus the Fire-Bringer

日時

2月23日 [木・祝]、24日 [金]、3月2日 [木]、3日 [金]
16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30
2月25日 [土]、26日 [日]、3月4日 [土]、5日 [日]
13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30

上演時間

約30分

会場

SHIBAURA HOUSE 5F
〒108-0023 港区芝浦3-15-4

参加方法

要予約・ commonsパス提示

Dates

February 23rd [Thu], 24th [Fri], March 2nd [Thu], 3rd [Fri]
16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/19:00/19:30
February 25th [Sat], 26th [Sun], March 4th [Sat], 5th [Sun]
13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/16:00/16:30/17:00/17:30

Performance times

Approx. 30 min.

Venue

5F SHIBAURA HOUSE
3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023

How to participate

Booking essential. Show general admission pass on entry.

VR技術を駆使したプロメテウス3部作の最終章。 「あたらしいヒューマン」が生まれる、近未来の神話。

The final chapter of the VR Prometheus Trilogy.
A neo-futuristic mythology created by the “New Human.”

国家、共同体と個人の関係、人間の身体と感情の関係性を、現実と虚構を織り交ぜた実験的映像やパフォーマンスで探究するアーティスト、小泉明郎。近年ではAR/VR技術をパフォーマンスに取り込んだ作品を積極的に発表。あいちトリエンナーレ2019で初演された『縛られたプロメテウス』では、第24回文化庁メディア芸術祭アート部門大賞を受賞し国内外で上演を重ねるなど、高い評価を受けている。

今回小泉は、VR演劇『縛られたプロメテウス』(2019)、VR彫刻『解放されたプロメテウス』(2021)に続くプロメテウス3部作の最終章『火を運ぶプロメテウス』の創作に取り組む。天上界から火を盗み人類に授けたプロメテウスの神話は、人類とテクノロジーの緊張関係を象徴するが、実際に遺伝子操作によって人類の身体や知覚そのものが書き換えられたら、「あたらしいヒューマン」はどんな痛みや喜びを感じ、自然や宇宙との関係を再構築するのだろうか。小泉はこの問いから出発し、VRの世界でのみ体験しうる、近未来の神話を編み上げる。そこで私たちが体験するのは「よきヒューマン」となった未来の人類か、それとも？

上演言語

日本語 (英訳テキストの配布あり)

クレジット

構成・演出 | 小泉明郎
VR制作 | 谷口勝也 (Rhino Studios)
演出助手 | 小山涉
舞台監督 | 守山真利恵
プロダクションマネジメント | bench

協力 | 慶應義塾大学 JST Keio Spring 「未来社会のグランドデザインを描く博士人材の育成」コアプログラム Arts/Design/Communication

プロフィール

小泉明郎 (こいずみ・めいろう) | 1976年群馬県生まれ。国家・共同体と個人の関係、人間の身体と感情の関係について、現実と虚構を織り交ぜた実験的映像やパフォーマンスで探究している。これまでテート・モダンのBMWテート・ライブや上海ビエンナーレ、シャルジャビエンナーレ等、多数の国際展等に参加。個展としては「Projects 99: Meiro Koizumi」(ニューヨーク近代美術館、2013)、「捕われた声は静寂の夢を見る」(アーツ前橋、2015)、「帝国は今日も歌う」(Vacant, 2017)、「Battlelands」(ペレス美術館、マイアミ、アメリカ合衆国、2018)等を開催。あいちトリエンナーレ2019で初演されたVR演劇『縛られたプロメテウス』は、第24回文化庁メディア芸術祭アート部門で賞を受賞。2021年には国際的なアートプライズである、Artes Mundi Prize (カーディフ、英国)を受賞。国内外の数多くの美術館等に作品が収蔵されている。

Meiro Koizumi is an artist who blends reality and fiction in experimental videos and performances that explore the relationships between the state, the collective, and the individual, as well as the human body and its emotions. In recent years, he has presented numerous works that incorporate AR/VR technology into performance. His Aichi Triennale 2019-premiered theater piece *Prometheus Bound* has been performed in Japan and abroad to high acclaim, winning the Grand Prize in the 24th Art Division of the Japan Media Arts Festival.

In this new work, Koizumi presents *Prometheus the Fire-Bringer*, the final chapter of the Prometheus trilogy, following the VR play *Prometheus Bound* (2019) and VR sculpture *Prometheus Unbound* (2021). The myth of Prometheus, who stole fire from the heavens and bestowed it upon humanity, symbolizes the tension between humans and technology. When the bodies and knowledge of the human race are actually altered by genetic engineering, what kind of pain or pleasure will the “new human” feel, and how will they reconstruct their relationship with nature and the universe? Using this query as a departure point for exploration, Koizumi creates a neo-futuristic mythology that can only be experienced through the world of VR. Will the participants witness a new and improved version of the human race from a near future...or something else?

Language

Japanese (English translation of the text will be provided)

Credit

Concept and Direction | Meiro Koizumi
VR Production | Katsuya Taniguchi (Rhino Studios)
Assistant Director | Wataru Koyama
Stage Manager | Marie Moriyama
Production Management | bench Co.

Support | JST Keio Spring “Nurturing of doctoral students who will map the grand designs for future society,” Core Program Arts/Design/Communication

Profile

Meiro Koizumi | Born in 1976 in Gunma, Japan. He explores the relationships between the state/community and the individual, and between the human body and emotions, through experimental videos and performances that interweave reality and fiction. He has participated in numerous international exhibitions such as Tate Modern’s BMW Tate Live, Shanghai Biennale, and Sharjah Biennale. His solo exhibitions include “Battlelands” (Pérez Art Museum Miami, 2018), “Today My Empire Sings” (Vacant, Tokyo, 2017), “Trapped Words Dream of Silence” (Arts Maebashi, Japan, 2015), “Projects 99: Meiro Koizumi” (Museum of Modern Art, New York, 2013). His experimental VR Theater piece “Prometheus Bound,” which was premiered at Aichi Triennale 2019, won the Grand Prize in the 24th Art Division of the Japan Media Arts Festival. In 2021, he won Artes Mundi Prize (Cardiff, UK). His installation works are included in numerous public collections worldwide.



Photo: Matadero Madrid/
Photo: Bego Solís



Photo: Kayo Yamashita

サエボーグ Saeborg

ソウルトピア Soultopia

メタバース
リモート参加有
Metaverse
Online participation

日時

リモート参加 | 2月23日 [木・祝]-3月5日 [日]
18:00/20:00
デモ版体験 | 3月2日 [木]-5日 [日]
14:00-19:00

上演時間

約60分

会場

オンライン (VR Chat)
デモ版体験 | ゲーテ・インスティトゥート東京 ホワイエ
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法

リモート参加 | 要予約

*コモンズパス、リモートパス購入いずれの場合も予約ページから予約が必要です。パス購入後に送付される専用ページ掲載のURLにアクセスしてご予約ください。

デモ版体験 | 予約不要・コモンズパス提示

・メタバースの一部を、会場に用意されたヘッドマウントディスプレイにてご体験いただけます。
・メタバース空間内を自由に移動し体験いただけますが、デモ版となりますので、実際の作品体験とは異なります。ご了承ください。

Date

Online participation | February 23rd [Thu]-March 5th [Sun]
18:00/20:00
Demonstration at the venue | March 2nd [Thu]-5th [Sun]
14:00-19:00

Performance times

Approx. 60 min.

Venue

Online (VR Chat)
Demonstration | Goethe-Institut Tokyo, Foyer
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to participate

Online participation | Booking essential.

*Reservations are required for both Commons Pass and Online Pass holders. To make a reservation, please access the URL on the dedicated page sent to your email upon purchasing your pass.

Demonstration at the venue | No reservation is required. Show general admission pass on entry.

*You can experience a part of the Metaverse with the VR headsets provided at the venue. Also, you can move freely within the Metaverse space, but please be aware that this is a demonstration version and the experience will be different from the actual work.

キモ可愛い家畜動物たちが共生するメタバース空間。 玩具的・遊戯的な「ソウルトピア」で、動物に変身して戯れよう。

A metaverse space where disgustingly cute creatures exist in symbiosis.
Transform into an animal and frolic inside the whimsical, toy-like Soultopia.

自らの皮膚の延長としてラテックス製のボディスーツを自作し、装着するパフォーマンスを展開するアーティスト、サエボーグ。性別などの固定化されたアイデンティティや、人間の身体そのものを超越したいという強い願望を原動力に、玩具のような雌豚や害虫の着ぐるみに身を包み、食物連鎖の最底辺で明るく生きる家畜たちの世界を作り出してきた。その圧倒的なキャラクター愛と造形力は「Tokyo Contemporary Art Award (TCAA) 2022-2024」受賞など高く評価されている。

今回はシアターコモンズおよび世界演劇祭から委嘱を受けて、サエボーグがデザインする動物たちが共生する、メタバース空間をプロデュースする。世界中どこからでもアクセス可能な遊戯空間「ソウルトピア」では、誰もが自在に動物に変身し、人間界とは異なるルールで戯れることができる。家畜動物として、ジェンダー・年代・言語を超えたコミュニケーションを行うことで、物理的な接触をも超越する新たな出会いの形や交流を楽しめるはずだ。

注意事項

・本作品は、お客さまご自身のPC、PC用ヘッドマウントディスプレイ、Oculus Quest 2単体のいずれかのデバイスにて体験いただく作品となります。
・ご参加には、VR Chatへのアカウント登録が必要となります。
・VR Chatの推奨/最低動作環境は以下となります。以下の条件を満たさない場合、作品の体験ができません（環境を満たさない方、機材をお持ちでない方はゲーテ・インスティトゥート東京にてデモ版体験をご利用ください）。お使いのPCやソフトウェア環境が、VR Chatの推奨する動作環境かどうか、必ず事前にご確認ください。

[最低スペック] OS | Windows 8.1, Windows 10 / CPU | Intel i5-4590以上またはAMD FX-8350以上 / メモリ | 4GB以上 / グラフィック | NVIDIA GeForce GTX 970以上またはAMD Radeon R9 290以上

[推奨スペック] OS | Windows 10 / CPU | Intel i5-6500以上またはAMD Ryzen 5 1600 equivalent相当以上 / メモリ | 8GB以上 / グラフィック | NVIDIA GeForce GTX 1060以上またはAMD Radeon RX 580以上

*MacOSでは作品の体験ができませんので、ご注意ください。

上演言語

日本語・英語

クレジット

構成・デザイン | サエボーグ
ドラマトゥルク | セバスチャン・ブロイ
メタバース制作 | 株式会社ライノスタジオ
会場協力 | ゲーテ・インスティトゥート東京

プロフィール

サエボーグ | 1981年富山生まれ。東京を拠点に活動。サエボーグは不完全なサイボーグ。半人間で、半分玩具。自らの皮膚の延長としてラテックス製のボディスーツを自作し、装着するパフォーマンスを展開。近年の主な発表に、『Cycle of L』(高知県立美術館、2020)、『House of L』(あいちトリエンナーレ、2019)がある。海外では『Dark Mofu』(Mona Museum、2019)、第6回アテネ・ビエンナーレ (2018) などへ出展。これまでの全作品は、東京のフェティッシュパーティー「Department-H」で初演された後、国内外の国際展や美術館で発表されている。

Saeborg is an artist who creates and performs in her self-made latex bodysuits that serve as an extension of her skin. Driven by a strong desire to transcend the human body and fixed identities such as gender, she dons toy-like costumes of sow and vermin to create worlds where livestock live cheerfully at the bottom of the food chain. Her overwhelming attachment to her characters and her artistry in making them have been highly regarded, earning her the Tokyo Contemporary Art Award (TCAA) 2022-2024, among other accolades.

In this new work commissioned by Theater Commons Tokyo and Theater der Welt, Saeborg produces a metaverse space in which her signature animals live in symbiosis. The “Soultopia” is a play space accessible from anywhere in the world, where the rules of the human world do not apply: everyone is free to transform into animals and frolic together. Participants are invited to play as livestock, communicating beyond the bounds of gender, age, and language, and so enjoying new forms of encounter and interaction that transcend physical contact.

Please note |

・This work is experienced through a PC, PC VR, or Oculus Quest 2.
・Registration for an account on VR Chat is required to participate.
・This work may not be accessible if your system is not compatible with the program, VR Chat. The minimum/recommended computer configurations for using VR Chat are as follows. (If you do not meet the requirements below or do not have the appropriate equipment, please visit Goethe-Institut Tokyo to experience the demonstration version). Please make sure that your PC and software environment are compatible with VR Chat's minimum/recommended one before you reserve the slot.

[Minimum Requirements] OS | Windows 8.1, Windows 10 / CPU | Intel i5-4590 / AMD FX 8350 equivalent or greater / Memory | 4GB or more / Graphics | NVIDIA GeForce® GTX 970 / AMD Radeon R9 290 equivalent or greater
[Recommended Requirements] OS | Windows 10 / CPU | Intel i5-6500 / AMD Ryzen 5 1600 equivalent or greater / Memory | 8GB or more / Graphics | NVIDIA GeForce GTX 1060 / AMD Radeon RX 580 equivalent or greater
*Please note that you cannot experience the work on MacOS.

Language

Japanese and English

Credit

Concept and Design | Saeborg
Dramaturg | Sebastian Breu
Metaverse Production | Rhino Studios
Venue Support | Goethe-Institut Tokyo

Profile

Saeborg | Born 1981 in Toyama. Based in Tokyo (Japan). Saeborg, the imperfect cyborg, is half human, half toy. Saeborg creates latex body suits as extensions of her own skin, deploying them in performances. Recent exhibitions/performances include “Cycle of L” at the Museum of the Art, Kochi (2020), and “House of L” at Aichi Triennale (2019). She has additionally participated in “DARK MOFO” at Mona Museum, Australia (2019), and The 6th Athens Biennale “ANTI” (2018). All of her pieces to present have been shown in international exhibitions and museums in both Japan and abroad, following premieres at the Tokyo fetish party Department-H.



Photo: ZIGEN



Theater Commons Tokyo '22 / Photo by Shun Sato

佐藤朋子 Tomoko Sato

オバケ東京のためのインデックス 第二章 Index for Obake Tokyo: Chapter 2

レクチャーパフォーマンス

リモート参加有

Lecture Performance

Online participation

日時

3月2日 [木] 19:00
3月3日 [金] 19:00
3月4日 [土] 14:00/19:00
3月5日 [日] 15:00

上演時間

約70分

会場

ゲーテ・インスティテュート東京 ホール
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法

リアル参加 | 要予約・コモンズパス提示
リモート参加 | パス購入後に送付される専用ページ掲載のURLよりアクセスしてください

上演言語

日本語

Dates

March 2nd [Thu] /19:00
March 3rd [Fri] /19:00
March 4th [Sat] /14:00/19:00
March 5th [Sun] /15:00

Performance times

Approx. 70 min.

Venue

Goethe-Institut Tokyo, Hall
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to participate

In-person participation | Booking essential. Show general admission pass on entry.
Online participation | Please access the program via the link on the dedicated page sent upon purchase of your pass.

Language

Japanese

都市をトレースするレクチャーパフォーマンス、第三弾。 かつてパフォーマンスアートの聖地だった場の歴史が交差する。

The third installment of a lecture performance that traces the city.
The intersecting history of a once-sacred place for performance art.

土地や歴史の膨大なリサーチを新たなナラティブに再編成し、レクチャーパフォーマンスとして語り直す手法を開拓しているアーティスト、佐藤朋子。複数の物語／歴史の合流地点としてのレクチャーは、彼女の声と身体を経由し、そこにあり得たかもしれないもうひとつのフィクションを生み出す装置ともなる。

2021年、2022年と2年連続で、佐藤はシアターコモンズからの委嘱を受け、港区エリアをフィールドとするリサーチを展開。日本の近現代史の表舞台であり続け、現在も再開発により風景が激変する都心・港区。その過剰さと向き合うべく佐藤は、1965年に岡本太郎が記した都市論「オバケ東京」を出発点として、複数年かけてリサーチの成果を自らの身体にトレースする作業を継続している。第三弾となる今回は、1960年代にオノ・ヨーコ、ジョン・ケージなど数々の伝説的パフォーマンスが行われていた草月アートセンター（1958-71）の歴史を召喚しながら、レクチャーパフォーマンスを創作する。生身のパフォーマンス／語り手である佐藤自身の身体を経由することで、いかに「オバケ」的なるものが現在の都市に還元されるのだろうか。

クレジット

構成・演出 | 佐藤朋子
いけばな講師 | 秋山美晴 (草月流)
協力 | 一般財団法人 草月会
会場協力 | ゲーテ・インスティテュート東京

関連イベント

本作品の過去作品「オバケ東京のためのインデックス 序章」、「オバケ東京のためのインデックス 第一章」を、公演会場およびオンラインにて上映・公開いたします。

[上映会]

会場 | ゲーテ・インスティテュート東京 ホール
日時 | 3月3日 [金] 14:00-15:00 「オバケ東京のためのインデックス 序章」
15:15-16:30 「オバケ東京のためのインデックス 第一章」
3月5日 [日] 10:00-11:00 「オバケ東京のためのインデックス 序章」
11:15-12:30 「オバケ東京のためのインデックス 第一章」

参加方法 | 予約不要・コモンズパス提示

[オンライン配信]

配信期間 | 2023年2月23日 [木・祝]-3月31日 [金]
参加方法 | パス購入後に送付される専用ページ掲載のURLよりアクセスしてください。

プロフィール

佐藤朋子 (さとうともこ) | 1990年長野県生まれ。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。レクチャーの形式を用いた「語り」の芸術実践を行っている。近年の活動に、オンライン・プロジェクト「TWO PRIVATE ROOMS-往復朗読」(青柳菜摘と共同、2020-)、第14回恵比寿映像祭「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」(東京都写真美術館、2022) 出品、「公開制作 vol.2 佐藤朋子 狐・鶴・馬」(長野県立美術館、2022) など。また、シアターコモンズにて東京をフィールドに展開するプロジェクト「オバケ東京のためのインデックス」に2021年より取り組んでいる。
<http://tomokosato.info/>

Profile

Tomoko Sato | Born in Nagano in 1990. Received her M.F.A. in Film and New Media from Graduate School of Tokyo University of the Arts. Sato expresses with "narrative," mainly in her lecture-performance which is her main activity. Her recent works include "TWO PRIVATE ROOMS - A Circle of Reading" (Collaboration with Natsumi Aoyagi, 2020-), Participation in 14th Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions (Tokyo Photographic Art Museum, 2020) and "Public production vol.2 Tomoko Sato White fox, Antigone, Centaurus" (Nagano Prefectural Art Museum, 2022). Since 2021, she has been working on "Index for Obake Tokyo," a field work project based at Theater Commons Tokyo. <http://tomokosato.info/>



Photo: Ryusuke Ohno

Tomoko Sato is an artist reorganizing vast amounts of research on land and history into new narratives, and pioneering techniques of reimagining their telling in lecture performances. Confluences of multiple (hi)stories, her lectures act as the materialization of potential alternative fictions via the artist's voice and body.

For two consecutive years in 2021 and 2022, Sato was commissioned by Theater Commons Tokyo to conduct field research in the Minato Ward area, the thriving center of Japan's modern history. Even today, its city landscape is undergoing drastic changes due to redevelopment. In order to confront this excess, Sato has been tracing her research results on her own body for several years, using Taro Okamoto's 1965 urban treatise *Obake Tokyo (Ghost Tokyo)* as a departure point for exploration. In this third installment, she creates a lecture performance that invokes the history of the Sogetsu Art Center (1958-71), where numerous legendary performances by the likes of Yoko Ono and John Cage took place in the 1960s. How can ghostly things from the past be revived in the modern city through Sato's physical body, which serves as performer and narrator?

Credit

Concept and Direction | Tomoko Sato
Sogetsu Ikebana Lecturer | Miharuru Akiyama
Support | Sogetsu Foundation
Venue Support | Goethe-Institut Tokyo

Related programs

"Index for Obake Tokyo: Introduction" and "Index for Obake Tokyo: Chapter 1" can be viewed with the purchase of the Commons Pass or Online Pass.

[Screening]

Venue | Goethe-Institut Tokyo, Hall
Dates | March 3rd [Fri] 14:00-15:00 "Index for Obake Tokyo: Introduction"
15:15-16:30 "Index for Obake Tokyo: Chapter 1"
March 5th [Sun] 10:00-11:00 "Index for Obake Tokyo: Introduction"
11:15-12:30 "Index for Obake Tokyo: Chapter 1"

How to participate | No reservation is required. Show general admission pass on entry.

[Online streaming]

Streaming period | February 23rd [Thu]-March 31st [Fri]
How to participate | Please access the program via the link on the dedicated page sent upon purchase of your pass.



©Nanami Kozaki / ©Ren Segizawa

中村佑子 Yuko Nakamura

まなざしはまなざされない The Unseen Gaze

ワークショップ

展示

リモート参加有

Workshop

Exhibition of Video Works

Online participation

日時

ワークショップ |

2月9日 [木] 13:00-16:00

第1回：シネエッセイ制作方法のレクチャー

2月16日 [木] 13:00-16:00 第2回：制作の中間報告

2月24日 [金] 13:00-16:00 第3回：作品の講評

オンライン配信 (第1回ワークショップ) |

2月23日 [木・祝]-3月31日 [金]

展示 | 3月2日 [木]-5日 [日]

13:00-20:00 (最終日は19:00まで)

Dates

Workshop |

February 9th [Thu] / 13:00-16:00

Session 1: Lecture on how cine-essays are made

February 16th [Thu] / 13:00-16:00

Session 2: Interim report on production

February 24th [Fri] / 13:00-16:00

Session 3: Critique of works

Online streaming (Workshop Session 1) |

February 23rd [Thu]-March 31st [Fri]

Exhibition of Video Works | March 2nd [Thu]-5th [Sun] /

13:00-20:00 (until 19:00 on the last day)

Venue

3F SHIBAURA HOUSE

3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023

How to participate

Workshop | Booking essential.

- Intended for participants in their about 15-30 years old

- Capacity: Around 10 people (in case of high demand, entry will be allocated by selection)

- Participation fee: Free

- Application period: December 23rd, 2022-January 18th, 2023

(applicants will be notified of the results by January 25th)

Online participation | Please access the program via the link on the dedicated page sent upon purchase of your pass.

*Lecture from the first session will be available online.

Exhibition of Video Works | No reservation is required.

Show general admission pass on entry.

会場

SHIBAURA HOUSE 3F

〒108-0023 港区芝浦3-15-4

参加方法

ワークショップ | 要申し込み

- 対象：15-30歳程度の方

- 定員：10名程度 (応募者多数の場合は選考)

- 参加費：無料

- 募集期間：2022年12月23日 [金]-2023年1月18日 [水] 23:59

(結果は1月25日 [水]までにメールにて通知)

オンライン配信 | パス購入後に送付される専用ページ掲載の

URLよりアクセスしてください

*第1回ワークショップのレクチャーの様子をオンラインで配信します。

展示 | 予約不要・ commonsパス提示

非常事態という日常を生きる若者たちの、宙吊りの感覚と言葉たち。
シネエッセイという手法で顕在化する若者のまなざしを、
私たちはいかにまなざすのか。

The suspended sensations and words of youth living in states of emergency.

Through the cine-essay, how will we gaze upon the gaze of these young people?

映画監督・作家の中村佑子。『あえかなる部屋 内藤礼と、光たち』をはじめ、繊細な揺らぎを触覚的に掴み取る独自の映像世界で高い評価を得てきた。一方、単著『マザリング 現代の母なる場所』では、「母なる場所」をめぐる壮大な哲学的エッセイを編み上げ、新たな女性文学の最前線を切り拓いている。またシアター・ commons'21では、AR体験型映画『サスペンデッド』で新たな映像表現に挑戦し、大きな反響を呼んだ。

今回中村は、エッセイを書くように映像を綴るシネエッセイの手法で紡がれた言葉をベースにして、映像表現と散文表現の新たな地平を開拓するワークショップを展開。その成果をインスタレーションとして展示する。対象は青春時代をパンデミックの中で過ごしている現代の若者たち。震災、新型コロナ、遠くの戦争……思い返せば幼少期から「非常事態」に生きねばならなかった若者たちの、日常の記憶や感覚がシネエッセイという形で顕在化したとき、そこにはどんな宙吊りの感覚が立ち現れるだろう。シネエッセイには鑑賞者自身が批判的に映し出されてもいる。若者のまなざしを、私たちはどのようにまなざし返すのだろうか。

上演言語

日本語

クレジット

構成・演出 | 中村佑子

映像出演 | 川上紗和、兒崎七海、高木希美、村山陽那乃、壺沢連、高瀬凜子、中川真

演、濱崎真由子、小山まりあ、樋口結衣子、吉田灯里

制作アシスタント | 清水ひなた、辻響子

協力 | 立教大学現代心理学部映像身体学科

プロフィール

中村佑子 (なかむら・ゆうこ) | 1977年、東京生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科卒。哲学書房にて編集者を経て、テレビマンユニオン参加。美術や建築、哲学を題材としながら、現実世界のもう一枚深い皮層に潜るようなナラティブのドキュメンタリーを多く手がける。映画作品に『はじまりの記憶 杉本博司』、『あえかなる部屋 内藤礼と、光たち』(HOTDOCS正式招待作品)、テレビ演出作にWOWOW『はじまりの記憶 現代美術作家 杉本博司』(国際エミー賞・アート部門ファイナルノミネー)、NHK『幻の東京計画 首都にありえた3つの夢』(ギャラクシー奨励賞受賞)、NHK『建築は知っている ランドマークから見た戦後70年』などがある。シアター・ commonsでは、2019年にスーザン・ソントグの『アリス・イン・ベッド』のリーディングを演出、2021年にはAR体験型映画『サスペンデッド』を発表した。文芸誌『すばる』での長期連載を経て、2020年に初の単著『マザリング 現代の母なる場所』を出版。立教大学映像身体学科兼任講師。

Filmmaker and artist Yuko Nakamura has earned high praise for her unique visual lexicon that tangibly captures subtle movements, seen in works such as *A Room of Her Own: Rei Naito and Light*. She has also published *Mothering: Our Voice, Our Care in Modern Society*, a grand, philosophical series of essays in search of moments where mothering takes place, breaking new ground in women's literature. At Theater Commons Tokyo '21, Nakamura experimented with visual expression in the interactive AR film, *Suspended*, which garnered much positive attention.

Focusing on the cine-essay method (where images are spelled out as if writing an essay), Nakamura will develop a workshop to explore new horizons of visual expression and prose. The results of the workshop will be exhibited as an installation. The subjects of the workshop are the youth of today, whose adolescence is taking place in the midst of a pandemic. Natural disasters, COVID-19, distant wars...these young people have had to live in a "state of emergency" since childhood. What kind of suspended sensations will emerge when their everyday experiences are manifested in the form of a cine-essay? The cine-essay is also a critical reflection of the audience themselves. How will the audience gaze upon the gazes of these youths?

Language

Japanese

Credit

Concept and Direction | Yuko Nakamura

Video Exhibit | Sawa Kawakami, Nanami Kozaki, Nozomi Takagi, Hinano

Murayama, Ren Segizawa, Rinko Takase, Mai Nakagawa, Mayuko Hamasaki,

Maria Koyama, Yuiko Higuchi, Akari Yoshida

Production Assistant | Hinata Shimizu, Kyoko Tsuji

Support | Department of Body Expression and Cinematic Arts, College of Contemporary Psychology at Rikkyo University

Profile

Yuko Nakamura | Yuko Nakamura was born in Tokyo in 1977 and graduated from Keio University's Faculty of Letters as a Philosophy major. Following her work as an editor at a philosophy publisher, she joined TV MAN UNION. She is involved in the creation of many narrative documentaries that dive past the surface of the modern world, treating topics such as art and architecture, philosophy and more. Her films include "Memories of Origin: Hiroshi Sugimoto"; "A Room of Her Own: Rei Naito and Light" (official selection at 2017 Canadian International Documentary Festival Hot Docs 2017); TV documentary WOWOW "Memories of Origin: Contemporary Artist Hiroshi Sugimoto" (finalist for International Emmy Award for Arts Programming 2012); NHK "Illusory Tokyo Project: Three Potential Dreams of the Capital" (winner of Galaxy Honors for programs recommended 2015); NHK "Architecture Knows: Postwar 1970 as Seen From Landmarks," and more. In Theater Commons Tokyo, she directed the reading performance of Susan Sontag's "Alice in Bed" in 2019 and she presented interactive AR film "Suspended" in 2021. Her long-running essay series, "Mothering: Our Voice, Our Care in Modern Society" in literary magazine Subaru, has finally been published as a single author for the first time in 2020. A part-time lecturer in the Department of Body Expression and Cinematic Arts at Rikkyo University.





コモンズ・フォーラム #1 Commons Forum #1

フォーラム
リモート参加
Forum
Online participation

「孵化主義」を実践する ——「孵化／潜伏」の時間、からだ、物語 Practicing “Incubationism”: Time, Body, and Narrative of “Eclosion/Latency”

日時
2月23日 [木・祝] 19:30-21:30

上演時間
120分

会場
オンライン

参加方法
パス購入後に送付される専用ページ掲載のURLよりアクセスしてください

プログラム
第一部 コンセプトと問題提起
相馬千秋 (シアターコモンズ ディレクター)
第二部 ディスカッション
登壇者 | スザン・ボーハルト&ビアンカ・ファン・デル・スホート (アーティスト)、スザンネ・ケネディ (演出家)、市原佐都子 (劇作家、演出家、小説家、城崎国際アートセンター芸術監督)
司会 | 相馬千秋

Date
February 23rd [Thu] / 19:30-21:30

Performance times
120min.

Venue
Online

How to participate
Please access the program via the link on the dedicated page sent upon purchase of your pass.

Program
Part 1: Presentation of the concepts and issues
Chiaki Soma (Director of Theater Commons Tokyo)
Part 2: Discussion
Panelists | Suzan Boogaardt & Bianca van der Schoot (Artist), Susanne Kennedy (Director), Satoko Ichihara (Playwright, Director, Novelist, Artistic Director of Kinosaki International Arts Center)
Moderator | Chiaki Soma

孵化=インキュベーションという言葉には、「孵化」と「潜伏」、すなわち新しい生命の誕生と、ウイルスなどが症状として現れるまでの不安な時間が二重に含まれている。パンデミックでは、多くの人類がいつ終わるともわからない隔離や待機の時間で、「孵化／潜伏の時間」を経験した。進歩的な価値観では、非生産的なものと否定されがちな病や停滞の経験、宙吊りの時間を、ポストパンデミック時代の創作者たちはどのように捉え、創作を再起動しているのだろうか。

本フォーラムでは、「孵化主義」のコンセプトに共振し、世界演劇祭での新作を準備しているアーティストたちの声を聞くことで、「孵化主義」から派生する、多様で創造的な世界のありようをもに議論する。

上演言語
日本語 (英語通訳つき)

登壇者 / Panelists
ボーハルト/ファン・デル・スホート | スザン・ボーハルトとビアンカ・ファン・デル・スホートによるアーティスト・ユニットとして、1999年より活動開始。オランダのバントマイムの伝統を受け継ぎつつ、人間、自然、テクノロジーの関係を軸に作品を創作。ヴェネチア・ビエンナーレ2017演劇部門やルール・トリエンナーレ2015といった国際的シーンでの作品発表を行う他、美術館やオルタナティブスペースでも精力的に活動。より住みやすい未来へ向けて、人間とは何かという固定観念を問い直し、未来のための空間をつくることを試みている。2022年、シアターコモンズからの委嘱を受けて、インキュベーションをテーマとしたオンライン・レクチャーパフォーマンスを創作・発表した。

スザンネ・ケネディ | 1977年ドイツ生まれ。アムステルダム芸術大学(AHK)を卒業し、エルフリデー・イェリネク等の作品をオランダ各地の劇場で演出。2011年からミュンヘン・カンマーシュピレで演出活動を開始。2013年『インゴルシュタットの煉獄』で「テアター・ホイテ」の年間最優秀若手演出家に選出される。近年ではベルリン・フォルクスビューネとミュンヘン・カンマーシュピレを拠点に活動。仮面をつけた俳優たち、録音されたセリフが自動再生される特異な舞台は、ポストヒューマン時代の新たな演劇として注目を集めている。2021年には、シアターコモンズからの委嘱を受けて、VR技術を活用し、仮想空間だけで体験する演劇作品『I AM (VR)』を創作、世界初上演した。

市原佐都子 (いちはら・さとこ) | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督。2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた創作、演出を行う。2019年『バックスの信女 — ホルスタインの謎』をあいちトリエンナーレにて初演。同作にて第64回岸田国士戯曲賞受賞。2021年、ノイマルクト劇場 (チューリヒ) と共同制作した『Madama Butterfly』をチューリヒ・シアター・スペクタクル、ミュンヘン・シュピラート演劇祭、ウィーン芸術週間他に上演。

司会 / Moderator
相馬千秋 (そうま・ちあき) |
シアターコモンズ ディレクター
—
Chiaki Soma | Director of
Theater Commons Tokyo



©NÓI CREW

The term incubation has the dual meaning of “eclosion” and “latency”—the former referring to the birth of new life, and the latter indicating the anxious waiting period before the symptoms of a virus appear. In the pandemic, many humans experienced a time of “eclosion/latency” through a period of endless quarantine and waiting. How do artists in the post-pandemic era view the experience of illness, stagnation, and suspended time, so often dismissed as unproductive from the perspective of modern values? How are they renewing their creativity?

In this forum, we will hear from artists who resonate with this concept of “incubationism” as they prepare new works for Theater der Welt. Together, we will discuss how diverse and creative a world derived from “incubationism” could be.

Language
Japanese (with English interpretation)

Boogaardt/VanderSchoot | The work of the artist-duo Boogaardt/VanderSchoot revolves around the relationship between humankind, nature, and technology. After an exploration of image culture in the Visual Statements-series (2011-2014), they continued their artistic research on digital creatures in a non-human era in the Future Fossils-series, and are now developing a new series titled “Rooms for Transformation” (2021-2024). Attempting to make space for the future, Boogaardt/VanderSchoot questions the fixed idea of what is human so as to transition towards a more livable future. Commissioned by Theater Commons Tokyo in 2022, they created and presented “TRAVELING WITHOUT MOVING,” an online lecture performance on the theme of “incubation.”



Photo: Annaleen Louwes

Susanne Kennedy | Born in Germany in 1977. Susanne Kennedy studied theater direction at the Hogeschool voor de Kunsten in Amsterdam and debuted on the Dutch stage. In 2011 she was invited to work at the Münchner Kammerspiele. For “Fegefeuer in Ingolstadt,” she was voted Young Director of the Year by Theater heute magazine in 2013. In recent years, she has been based at Volksbühne Berlin and Münchner Kammerspiele. Distorted by masks, playback dialogue, doppelgängers and multimedia, the actors confront the audience with a post-humanistic subjectivity. Commissioned by Theater Commons Tokyo, in 2021 she premiered “I AM (VR),” in which she utilized VR technology to create a theater experience exclusive to the virtual realm.

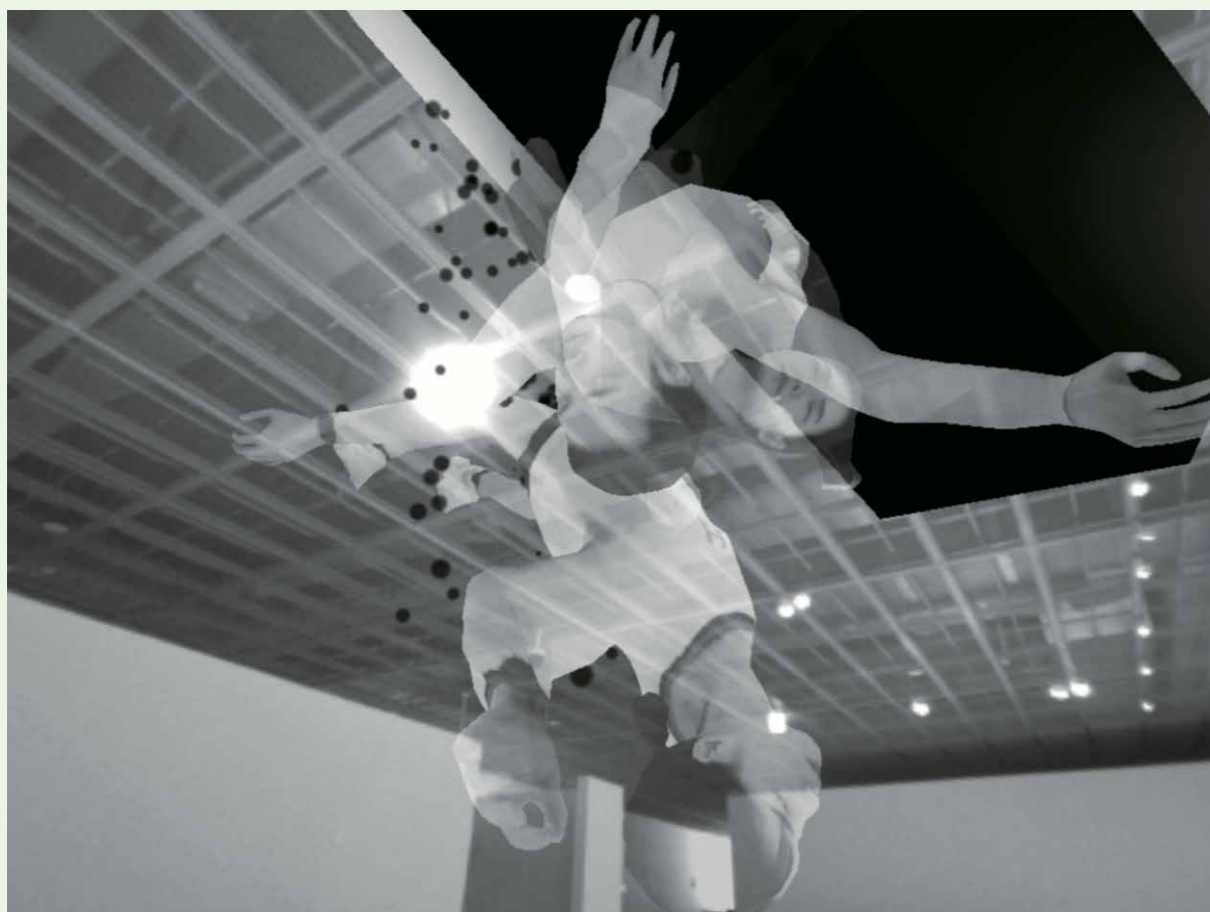


©Franziska Sinn

Satoko Ichihara | Playwright, director, novelist and Artistic Director of Kinosaki International Arts Center (KIAC). Ichihara Satoko has led the theater company Q since 2011. She writes and directs plays that deal with human behavior, the physiology of the body, and the unease surrounding these themes, using her unique sense of language and physical sensitivity. In 2019, “The Bacchae—Holstein Milk Cows” based on a Greek tragedy, premiered at Aichi Triennale 2019 and won the 64th Kishida Kunio Playwriting Prize. In 2021, she co-produced “Madama Butterfly” with the Theater Neumarkt (Zurich), which was presented at Zürcher Theater Spektakel, SPIELART Theatre Festival (Munich) and Wiener Festwochen.



©Bea Borgers



Meiro Koizumi "Prometheus Unbound" ©Meiro Koizumi

コモンズ・フォーラム #2 Commons Forum #2

フォーラム
リモート参加
Forum
Online participation

メタバース時代における バーチャル・ドラマツルギーのゆくえ The Future of Virtual Dramaturgy in the Age of the Metaverse

日時
2月26日 [日] 19:30-21:30

Date
February 26th [Sun] / 19:30-21:30

上演時間
120分

Performance times
120 min.

会場
オンライン

Venue
Online

参加方法
パス購入後に送付される専用ページ掲載のURLよりアクセスしてください

How to participate
Please access the program via the link on the dedicated page sent upon purchase of your pass.

AR (拡張現実)、VR (仮想現実)といったデジタル技術が、アートの表現領域を拡張して久しい。これらの技術革新によって、日々無数のメタバース (仮想世界) が生成・更新され、あらゆる分野における共集や発信のあり方にも大きな変化が生じている。もはやデジタル/アナログ、リアル/バーチャルといった二分法が無効な時代に、その両者を自由に行き来しながら、人間の知覚や認識、身体の可能性と限界に批判的に向き合うことは可能なのだろうか。また、神話世界や動植物の視点など、古くから人間が想像力を駆使して叙述してきた異次元の物語は、VR/AR技術の介入によって、新たな知覚とともにいかに追体験されるのだろうか？

本フォーラムでは、今回のシアターコモンズや世界演劇祭で創作される作品を具体例に、メタバース時代の芸術表現の可能性と限界、その倫理について議論する。

登壇者 | 小泉明郎 (アーティスト)、サエボーグ (アーティスト)、シュウ・ツェユー (アーティスト)
司会 | 相馬千秋 (シアターコモンズ ディレクター)

上演言語
日本語 (英語通訳つき)

Since their invention, digital technologies such as AR (augmented reality) and VR (virtual reality) have long expanded the realm of artistic expression. These technological advances have made way for the daily creation and innovation of countless metaverses (virtual worlds), and have also brought about drastic changes in every field, including the ways in which we gather together and transmit information. In an age when dichotomies such as digital/analog or real/virtual no longer make sense, is it possible to move freely between the two and critically confront the possibilities and limitations of human perception, cognition, and the body? Since ancient times, humans have used their imaginations to describe other dimensions, including mythical worlds and worlds told through the perspective of plants and animals. With the intervention of VR/AR technology, how can these stories be recaptured with new sensibilities?

In this forum, we will discuss the ethics, possibilities, and limitations of artistic expression in the age of the metaverse, using specific examples of works created at this year's Theater Commons Tokyo and Theater der Welt.

Panelists | Meiro Koizumi (Artist), Saeborg (Artist), Hsu Che-Yu (Artist)
Moderator | Chiaki Soma (Director of Theater Commons Tokyo)

Language
Japanese (with English interpretation)

登壇者 / Panelists

シュウ・ツェユー (許哲瑜) | 1985年、台北生まれ。メディアと記憶の関係性にフォーカスしたアニメーションや映像作品を制作。個人および共同体の記憶を視覚化・構造化する。2022年より、オランダ国立芸術アカデミー (ライクス・アカデミー) のレジデンシーに参加。ベルギー高等美術学校 (2019年-2020年) 及びフランスのル・フレノワ (2020年-2022年) にレジデント・アーティストとして在籍。国立台南芸術大学造形芸術研究所修士課程修了。2019年、ヒューゴ・ボス・アジア・アート賞ファイナリスト。サンパウロ・ビエンナーレ (2021年)、ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ (2021年)、ビデオナーレ18 (2021年)、上海ビエンナーレ (2018年)、ロンドン・デザイン・ビエンナーレ (2018年)、等多くの国際展の他、ニューヨーク映画祭 (2020年)、ロッテルダム国際映画祭 (2018年、2020年、2023年) 等の映画祭へ出品している。

Hsu Che-Yur | Born in 1985 in Taipei, Hsu is artist who creates animation and film works which focus on the relationship between media and memories. Through these works, he has tried to visualize and structuralize the memories inside individual and communities. In 2022, he begins his residency at Rijksakademie in Amsterdam. He participated in the residency program in HISK (Higher Institute for Fine Arts, Ghent, Belgium, 2019-2020) and Le Fresnoy - Studio national des arts contemporains (Tourcoing, France, 2020-2022). Previously, he obtained a master's degree from the Graduate Institute of Plastic Arts, Tainan National University of the Arts (M.F.A., Taiwan). Also, he was selected as finalist for Hugo Boss Asia Art Award (Rockbund Art Museum, 2019). His work participated in Shanghai Biennale (2018), London Design Biennale (2018), the 34th Bienal de São Paulo (2021), the 11th Seoul Mediacity Biennale (2021), VIDEONALE.18 (2021), and film festivals NYFF (New York Film Festival) (2020), IFFR International Film Festival Rotterdam (2018, 2020, 2023).



小泉明郎
(こいずみ・めいろ) |
アーティスト
—
Meiro Koizumi | Artist



Photo: Matadero Madrid/
Photo: Bego Solis

サエボーグ | アーティスト
—
Saeborg | Artist

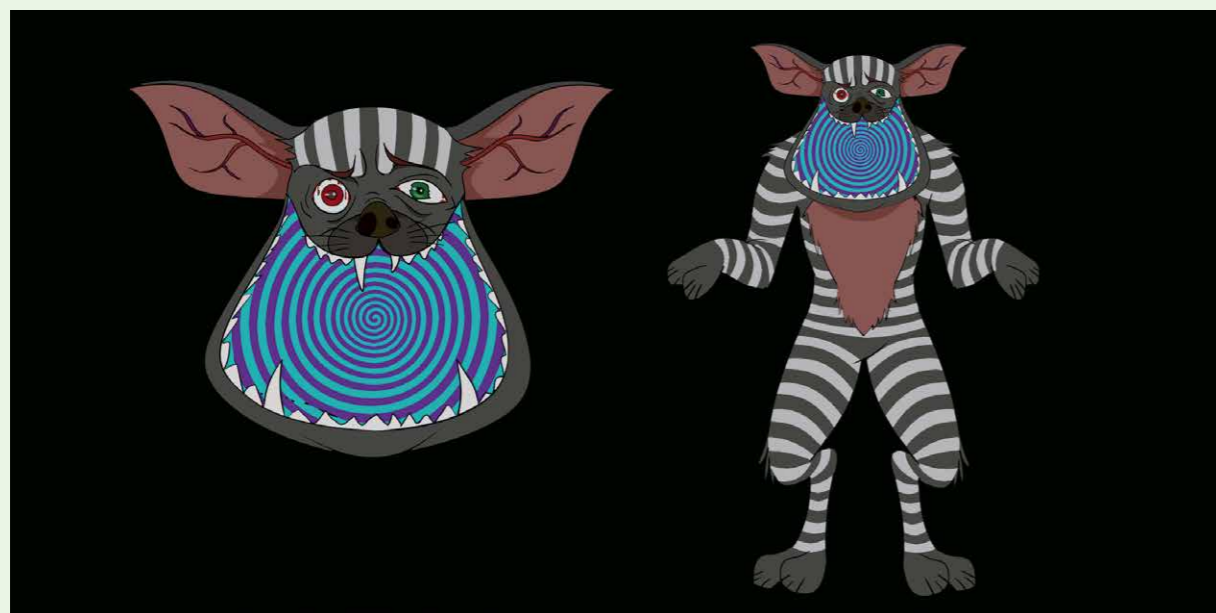


Photo: ZIGEN

司会 / Moderator
相馬千秋 (そうま・ちあき) |
シアターコモンズ
ディレクター
—
Chiaki Soma | Director
of Theater Commons
Tokyo



©NÓI CREW



©Ho Tzu Nyen

コモンズ・フォーラム #3 Commons Forum #3

フォーラム

リモート参加

Forum

Online participation

「世界」を複数化する ——東洋思想における「世界」

Pluralizing the World: The World in Eastern Thought

日時

3月4日 [土] 19:30-21:30

上演時間

120分

会場

オンライン

参加方法

パス購入後に送付される専用ページ掲載のURLよりアクセスしてください

上演言語

日本語 (英語通訳つき)

プログラム

第一部 基調レクチャー
中島隆博 (東京大学教授)
第二部 ディスカッション
登壇者 | ホー・ツーニエン (アーティスト)、サオダット・イズマイロボ (アーティスト)、中島隆博
司会 | 岩城京子 (演劇パフォーマンス学研究者、アントワープ大学専任講師)、相馬千秋 (シアターコモンズ ディレクター)

Date

March 4th [Sat] / 19:30-21:30

Performance times

120 min.

Venue

Online

How to participate

Please access the program via the link on the dedicated page sent upon purchase of your pass.

Language

Japanese (with English interpretation)

Program

Part 1: Keynote lecture
Takahiro Nakajima (Professor, University of Tokyo)
Part 2: Discussion
Panelists | Ho Tzu Nyen (Artist), Saodat Ismailova (Artist), Takahiro Nakajima
Moderators | Kyoko Iwaki (Theatre and Performance Lecturer at University of Antwerp), Chiaki Soma (Director of Theater Commons Tokyo)

私たちが日常的に使う「世界」という言葉は、そもそも何を意味しているのだろうか。西洋文化圏における「World」と、東洋の漢字文化圏における「世界」は、同じものを指しているようで、根本的には異なっているかもしれない。近代化・西洋化の過程の中で共有されてきた単数形の「World」に対して、あえて複数形の「Worlds」を用いることで、私たちは世界をどのように捉え直すことができるのだろうか。

本フォーラムでは、世界演劇祭に先がけて、自明のようでそうでない「世界」という概念について、東洋・西洋の哲学に精通する専門家にレクチャーをしていただく。そしてアジアのアーティストたちの作品を具体例に、彼らの創作を下支えする東洋思想の「世界観」について、多面的な議論を始動したい。

登壇者 / Panelists

中島隆博 (なかじま・たかひろ) | 東京大学東洋文化研究所教授。東アジア藝文書院院長。中国哲学・世界哲学研究者。東京大学大学院総合文化研究科准教授等を経て現職。東アジア哲学を問う東アジアさらには西洋哲学との比較において考える。著書に『ヒューマニティーズ 哲学』(岩波書店、2009年)、『共生のプラクシス 国家と宗教』(東京大学出版会、2011年)、『悪の哲学 中国哲学の想像力』(筑摩選書、2012年)など。

ホー・ツーニエン | 歴史的、理論的なテキストを出発点としたビデオ、インスタレーション、パフォーマンス作品を制作。近年では、ハマー美術館 (2022年)、豊田市美術館 (2021年)、山口情報芸術センター (YCAM) (2021年) で作品を展示。台湾のアーティスト許家維 (シュウ・ジャウエイ) とともに、国立台湾美術館で開催された第7回アジア・アート・ビエンナーレ「山と海を越えた異人」をキュレーションした。2015年から2016年までDAADレジデントとしてベルリンに滞在。

サオダット・イズマイロボ | ウズベキスタンの映画監督・アーティスト。タシュケント州立芸術大学 (ウズベキスタン)、ル・フレノア国立現代アートスタジオ (フランス) 卒業。アムステルダム市立美術館、ボンビドゥー・センター (パリ) 等に作品が所蔵されている。2022年、ヴェネチア・ビエンナーレ公式プログラムに出展するとともに、中央アジア出身のコレクティブ Davra を立ち上げ、ドクメンタ15に参加した。2022年、アムステルダムのアイ・アート&フィルム賞を受賞。

司会 / Moderators

岩城京子 (いわき・きょうこ) | 演劇・パフォーマンス研究。アントワープ大学文学部芸術学科専任講師。演劇ジャーナリストとして活動したのち、2017年にロンドン大学ゴールドスミス校にて博士号 (演劇学) を修め、同校にて教鞭を執る。専門は日欧現代演劇史、及び演劇応用理論。2017年に博士号取得後、アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を得て、ニューヨーク市立大学大学院シーガルセンター客員研究員。単著に『日本演劇現在形』(フィルムアート社) 等。

相馬千秋 (そうま・ちあき) | シアターコモンズ ディレクター



©NOI CREW

What does the commonly-used word “World” actually mean? The words for “World” in Western cultures and the “世界” of Eastern cultures may seem to refer to the same concept, but perhaps they are fundamentally different. How can we redefine the world by intentionally contrasting the singular “World,” a concept spread through the processes of modernization and Westernization, with the plural “Worlds”?

In this forum, an expert in Eastern and Western philosophies will provide a lecture on this seemingly self-evident concept of “World,” as a lead up to Theater der Welt. While referring to concrete examples of Asian artists and their creations, we would like to open up a multifaceted discussion on the “worldview” of Eastern thought that underpins their works.

Takahiro Nakajima | Professor of Chinese philosophy and world philosophy at the Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo, Japan. Director of East Asian Academy for New Liberal Arts. After working as an associate professor at the University of Tokyo Graduate School of Arts and Sciences, he assumed his current position. His research focuses on East Asian philosophy in comparison with inter-East Asian and Western philosophy. His publications include “Philosophy in Humanities” (Iwanami Shoten, 2009), “Praxis of Co-existence: State and Religion” (University of Tokyo Press, 2011), “Philosophy of the Evil: The Imagination of Chinese Philosophy” (Chikuma Selected Books, 2012), etc.



Ho Tzu Nyen | Ho Tzu Nyen makes videos, installations and performances that often begin as engagements with historical and theoretical texts. Recent exhibitions of his work have been held at the Hammer Museum (2022), Toyota Municipal Museum of Art (2021) and Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM] (2021). Together with Taiwanese artist Hsu Chia-wei, he curated ‘The Strangers from Beyond the Mountain and the Sea,’ the 7th Asian Art Biennale, at the National Taiwan Museum of Fine Arts. From 2015 to 2016, he was a DAAD resident in Berlin.



©Matthew Teo

Saodat Ismailova | Saodat Ismailova is an Uzbek filmmaker and artist graduated from Tashkent State Art Institute in Uzbekistan and Le Fresnoy, National Studio of Contemporary Arts in France. Works of Saodat Ismailova are in collection of Stedelijk Museum, Amsterdam, The Centre Pompidou, Paris, etc. In 2022 Saodat Ismailova participated in 59th Biennale of Venice’s main exhibition and presented new work at documenta fifteen for which has also initiated Davra collective from Central Asia. In 2022, Ismailova received The Eye Art & Film Prize, Amsterdam.



©Rinat Karimov

Kyoko Iwaki | Kyoko Iwaki is a Tenure-tracked Lecturer of Theatre and Performance Studies at University of Antwerp. Her research focuses on Japanese and European theatre of environmental, feminist, and more-than-human philosophies with strong investment in Buddhism. Kyoko obtained a PhD from Goldsmiths, University of London in 2017. After her completion of PhD, she became a Visiting Scholar at The Segal Center, City University of New York. Prior to entering academia, she has worked over a decade as a theatre critic contributing to Asahi Shimbun Newspaper.



会場

VENUES

ゲーテ・インスティトゥート東京

〒107-0052 港区赤坂7-5-56
Tel: 03-3584-3201
東京メトロ銀座線・半蔵門線/
都営大江戸線「青山一丁目駅」4 (北) 出口より徒歩8分

Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052
Tel: 03-3584-3201
Aoyama-itchome Station (Tokyo Metro Ginza or
Hanzomon Lines / Toei Oedo Line): 8 minutes walk
from 4 (North) Exit

SHIBAURA HOUSE

〒108-0023 港区芝浦3-15-4
Tel: 03-5419-6446
JR「田町駅」東口 (芝浦口) より徒歩7分
都営三田線・浅草線「三田駅」A4出口より徒歩10分

SHIBAURA HOUSE

3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023
Tel: 03-5419-6446
Tamachi Station (JR): 7 minutes walk from East
(Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines):
10 minutes walk from A4 Exit

スケジュール / SCHEDULE

コモンズ・フォーラム
Commons Forum

2023 **2** FEB

3 MAR

アーティスト / 演目	9 THU	16 THU	23 THU	24 FRI	25 SAT	26 SUN	27 MON	28 TUE	1 WED	2 THU	3 FRI	4 SAT	5 SUN
小泉明郎 「火を運ぶプロメテウス」 Meiro Koizumi “Prometheus the Fire-Bringer”			16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/ 19:00/19:30		13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/ 16:00/16:30/17:00/17:30					16:00/16:30/17:00/17:30/18:00/18:30/ 19:00/19:30		13:00/13:30/14:00/14:30/15:00/15:30/ 16:00/16:30/17:00/17:30	
サエボーグ 「ソウルトピア」 Saeborg “Soultopia”			オンライン Online 18:00/20:00							オンライン Online 18:00/20:00 会場(デモ版体験) Venue (Demonstration) 14:00-19:00			
佐藤朋子 「オバケ東京のためのインデックス 第二章」 Tomoko Sato “Index for Obake Tokyo: Chapter 2”										19:00	関連作品上映 Screening 14:00-15:00 15:15-16:30	14:00/19:00	15:00 関連作品上映 Screening 10:00-11:00 11:15-12:30
中村佑子 「まなざしはまなざされない」 Yuko Nakamura “The Unseen Gaze”		ワークショップ Workshop 13:00-16:00		ワークショップ Workshop 13:00-16:00						展示 Exhibition of Video Works 13:00-20:00 *最終日は19:00まで *Until 19:00 on the last day			
コモンズ・フォーラム #1 「『孵化主義』を実践する ——『孵化／潜伏』の時間、からだ、物語」 Commons Forum #1 “Practicing ‘Incubationism’: Time, Body, and Narrative of ‘Eclosion/Latency’”			19:30-21:30										
コモンズ・フォーラム #2 「メタバース時代における バーチャル・ドラマトウルギーのゆくえ」 Commons Forum #2 “The Future of Virtual Dramaturgy in the Age of the Metaverse”						19:30-21:30							
コモンズ・フォーラム #3 「『世界』を複数化する ——東洋思想における『世界』」 Commons Forum #3 “Pluralizing the World: The World in Eastern Thought”												19:30-21:30	

クレジット

シアターコモンズ '23

シアターコモンズ実行委員会

委員長 | 相馬千秋 (特定非営利活動法人芸術公社 代表理事)
副委員長 | 王淑芳 (台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター長)
委員 | ベーター・アンダース (ゲーテ・インスティトゥート東京 所長)
委員 | サンソン・シルヴァン (在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本文化担当官)
委員 | バス・ヴァルクス (オランダ王国大使館 広報・政治・文化部 副部長)
委員 | 大館奈津子 (特定非営利活動法人芸術公社 理事)
監事 | 須田洋平 (弁護士)

シアターコモンズ実行委員会事務局

ディレクター | 相馬千秋 (芸術公社)
制作・事務局統括 | 清水聡美 (芸術公社)
制作 | 藤井さゆり (芸術公社、bench)、山里真紀子、芝田遥、谷口裕子、阿部幸 (芸術公社)、関あゆみ
制作アドバイザー | 戸田史子 (芸術公社)
企画アドバイザー | 岩城京子、大館奈津子 (芸術公社)
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
編集 (レポート) | 鈴木理映子 (芸術公社)
広報 | 岩本室佳
広報アドバイザー | 若林直子
翻訳 | リリアン・キャンライト、水野響、森本優芽 (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)
ウェブデザイン | 加藤賢策、伊藤博紀 (LABORATORIES)
票券 | 木下京子
インターン | 柏原瑚子、藤崎春花、吉岡直哉
法務アドバイザー | 須田洋平 (弁護士 / 芸術公社)

シアターコモンズ'23 技術スタッフ

舞台監督 | ラング・クレイグヒル
照明 | 帆足ありあ、山下恵美 (RYU Inc.)
音響 | 稲荷森健
映像 | 佐藤佑樹 (エディスグローヴ)
記録映像・写真 | 佐藤駿

シアターコモンズ '23

発行日 | 2023年2月23日
執筆 | シアターコモンズ実行委員会
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
翻訳 | リリアン・キャンライト、水野響、森本優芽 (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策、和田真季 (LABORATORIES)
デザイン協力 | 望月滉大 (LABORATORIES)
発行 | シアターコモンズ実行委員会
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artsccommons.tokyo.inquiry@gmail.com

禁断複製・転用 ©シアターコモンズ実行委員会 2023

CREDIT

Theater Commons Tokyo '23

Theater Commons Tokyo Executive Committee

Chairperson | Chiaki Soma (Representative Director, Arts Commons Tokyo)
Vice-chairman | WANG Shu-Fang (Director, Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan)
Member | Peter Anders (Director, Goethe-Institut Tokyo)
Member | Samson Sylvain (Attaché culturel, Embassy of France in Japan / Institut français du Japon)
Member | Bas Valckx (Deputy Head Public Diplomacy, Political, Cultural Affairs, Embassy of the Kingdom of the Netherlands)
Member | Natsuko Odate (Board Director, Arts Commons Tokyo)
Auditor | Yohei Suda (Lawyer)

Theater Commons Tokyo Staff

Executive Director | Chiaki Soma (Arts Commons Tokyo)
Production Manager and Coordinator | Satomi Shimizu (Arts Commons Tokyo)
Project Coordinator | Sayuri Fujii (Arts Commons Tokyo, bench Co.), Makiko Yamazato, Haruka Shibata, Yuko Taniguchi, Sachi Abe (Arts Commons Tokyo), Ayumi Seki
Production Adviser | Fumiko Toda (Arts Commons Tokyo)
Project Advisor | Kyoko Iwaki, Natsuko Odate (Arts Commons Tokyo)
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Editor (Report) | Rieko Suzuki (Arts Commons Tokyo)
PR | Sayaka Iwamoto
PR Advisor | Naoko Wakabayashi
Translation | Lillian Canright, Hibiki Mizuno, Yume Morimoto (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)
Web Design | Kensaku Kato, Hiroki Ito (LABORATORIES)
Ticket | Kyoko Kinoshita
Intern | Coco Kashiwara, Haruka Fujisaki, Naoya Yoshioka
Legal Adviser | Yohei Suda (Lawyer / Arts Commons Tokyo)

Theater Commons Tokyo '23 Technical Staff

Stage Manager | Lang Craighill
Lighting | Aria Hoashi, Megumi Yamashita (RYU Inc.)
Sound | Takeshi Inarimori
Movie | Yuki Sato (Edith Grove)
Documentation Video and Photography | Shun Sato

Theater Commons Tokyo '23

Date of Issue | February 23rd, 2023
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Translation | Lillian Canright, Hibiki Mizuno, Yume Morimoto (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato, Maki Wada (LABORATORIES)
Design Assistant | Kota Mochizuki (LABORATORIES)
Text and Published by Theater Commons Tokyo Executive Committee
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artsccommons.tokyo.inquiry@gmail.com

©Theater Commons Tokyo Executive Committee 2023. All rights reserved.